城ケ崎莉嘉と赤城みりあの妊娠・出産

祝って自分がプロデュースを手がけている二人のアイドルが自分の誕生日を突然ひとの訪問にはいってくれている。その二人とは城ヶ崎莉嘉と赤城みりあ。
自分を部屋から追い出したかと思うと、二人はごそごそと何かを始めた。

り「準備おっけーだよっ！」
み「はいってきていーよっ♪」
P「では、入りまーす……す……っ!!」
自分を呼ぶ二人の声が部屋から聞こえた。
み「えへへっ、じゃーんっ！」
り「プレゼントはアタシたちだよー!!」
そこには下着姿の二人の姿があった。

み「ねえねえ、びっくりしたー？」
P「こ、これは一体……どういう……」
り「アタシたちの初めてがPくんへのプレゼントだよーっ!!うれしいでしょっ？」
P「そ、それは……さすがにダメですっ！」
み「えー？!みりあも、りかちゃんも、プロデューサーとエッチしたいのにっ!!」
り「そんなこと言うけど……Pくんはいつもアタシたちのこと、イヤラシー目でみてたよねっ？」
み「時間がなくて、プロデューサーの前で着替えた時だって、見てないふりして、ちらちらこっちのこと見てたよ～っ！」
P「そ、それはっ……」
盗み見していたことを二人は知っていたのだ。
り「でもでも～それって、アタシ達のことが好きだからだよね？
それって思相愛ってことだよっ！」
み「うんっ!!なんの問題もないねっ!!」

そこまで言われてしまうと、自分にはその無垢なる笑顔から紡ぎ出される誘惑に打ち勝てるはずもなかった。
なぜなら、一人に出会ったときから、その笑顔にずっと魅了されていたのだから。
しばしの逡巡のあと……ついに意を決する。
P「わかりました……二人の好意、無下にはできません。よろしくお願いします！」

り「準備出来たー？　アタシたちの初めての記念なんだよ～!!しっかり記録しておいてよねっ」
み「えへへっ、楽しみだねっ!!」

二人の顔には無邪気な笑顔が浮かんでいた。
不安や緊張している様子は見られない。
それほどまでに自分を信頼してくれていて、
身を任せる覚悟があるということならば、
これ程嬉しいことはない。
素直に二人からのプレゼントを
受け取るべきだろう。
いまさら躊躇することは、
逆に二人に不安を生じさせるだけなのだから……

P「腰回りを……ですか？」
一人からの、ちょっと奇妙に思えた撮影箇所の要求。
り「そうだよー。だって、赤ちゃんができた時に、体がどう変わったか確かめたいもんっ!!」
P「あか……ちゃん？」
み「うんっ！好きな人の赤ちゃんなら、女の子なら当然ほしいよねっ！」
思った以上に一人は先のことを見据えていた。
彼女たちははるかに先のことまで考えていたのだ。

P「わかりました、しっかりと記録しておきます！」
一人のためにも、ふさわしい男になれるように
心に誓いを立てて、カメラを向ける。

幼さを残しながらも、女へと変化を遂げる半ば、といったところのウエストライン。
腹にうっすらと乗る脂肪が健康的な肉感を演出していた。
それが、子を宿し、ぽっこりと膨らみをもつと考えただけで、興奮を抑えきれなかった。

二人の会話の記録に入る。
ポーズを決めたふたりがカメラに向けて話し始めた。
み「ちゃんと撮れてるー？」
り「これからPくんとエッチするよっ！」
み「えへへ、ドキドキするねー!!」

り「アタシたちの処女をPくんにあげちゃうんだよーっ!!」
み「したあとの感想はまたあとで言うねっ！」

気持ちを隠すつもりもない、最高の笑顔だった。
期待に胸を膨らませ、楽しみでしょうがないという
女を残した、あどけなさの残るその笑顔が、
一刻と幼なったあとにどう変わるのか……
も早く、それを知りたいとさえ思ってしまった。

み「やったぁ！みりあの勝ちだねっ！」
り「あーん！悔しいけど、しょうがないっ！みりあちゃん、がんばってね！」
み「ドキドキするよー!!えへへっ！」
ふたりで唐突に始めたジャンケンは、どちらが先にするかを決めるためだったらしい。
み「ほらっ、プロデューサーも早くきてよーっ!!」
ベッドの上で横たわり、誘うようにあられもなく足を開く。
街灯に引き寄せられる虫のように、いつのまにか屹立させたペニスを、みりあの股間の前にかざしていた。
り「ほらっ、女の子のアソコだよ～」
と言ってパンツをずらし、みりあの割れ目が目の前に現れた。
み「んっ……やんっ！くすぐったいよぉ」
膣や割れ目をくにくにと愛撫すると、蜜が割れ目の中からにじみ出る。
り「ほらっ、きれいなピンクでしょ？」
割れ目を開けば、きれいなサーモンピンクの膣口が体液で濡れ光っていた。

P「大丈夫……でしょうか？」
ペニスのサイズのことを考えると、ちゃんと入るのかどうか疑問だった。
み「ふたりでこっそり練習してきたから、きっと大丈夫だよー」
P「そ、そうなのですか？」
り「こんなに大きいとは思わなかったけどっ！」
P「で、では入れてみます……ダメそうなら、すぐやめますので言って下さい」
み「んっ……いま当たってる……」
膣口にしっかりと位置を確認して亀頭の先を押し当てる。
ゆっくり確実に前進させ、みりあの膣内へペニスを押し進めていった……

み「んっあっ……痛っ……んっ！」
軽い処女膜の抵抗。押し進め、ふっ……とそれがなくなると、
亀頭は温かい、ぬるっとした粘膜に包まれた。
み「あっ……入って……きたぁ♥んっ……広がってくるぅ……んっ！」
膣内から押し出そうとするかのように、先端はきつく締め付けられる。
り「すごぉい！こうやって入っていくんだぁ！みりあちゃん、痛く……ない？」
み「んっ……だ、大丈夫っ！入ってくるとき……あっ……ちょっとだけ痛かったけど、
んんっ！今はもうだいじょうぶだよっ！」
ペニスはまだ先端が少し入った程度だ。強がっていても体にぎゅっと
力が入っているのがわかる。

ハッ

んっ♥

これ以上動かしても良いものか躊躇していると、
み「もっと……動かしてもいいよっ♥」
り「動いてあげてっ！」
みりあちゃんも言ってるんだからっ！」
P「で、では動きますから、痛い時は我慢せずに言ってください」
ペニスを奥へと押し進む。
み「んっ！あっ……奥に……くるよぉ♥」
きゅっという抵抗を感じたらすぐに
引き戻し、抵抗が緩むとまた前に
押しつめる。
そうして、緩くピストン運動を
繰り返しながら、膣内の奥までペニスを
埋めりんしでなていく。
み「んっ……あぁっ!!」
先端にの反応が変わり
みりあの抵抗を生じる。
子宮口に軽くまで到達したのだった。

ズプズッ

ズッ

み「あっ……はぁんっ!!奥のじんじんするところっ！だめだよぉっ♥」
P「す、すみませんっ！」
子宮口に当てていたペニスの先端引っ込める。
り「えっ！？何？今どうなってるのっ!?」
み「んっ……奥までおちんちんが来たら、急にジンジンきて……ちょっとびっくりしちゃった！」
P「子宮口に当たったようですね……」
み「そう……なんだぁ♥」
P「も、もう……やめましょうかっ!?」
とりあえず初めてとしては成功!?と言っても良いだろう。
み「それはだめぇ！まだ、プロデューサーに赤ちゃんの素、もらってないよっ!!奥を強く押しすぎないなら……気持ちよかったからっ!!もっとしてっ♥」
P「告げた表情は歓喜と羞恥で赤く染まっていた。恥ずかしげに自分が快感を得ていたことを不快にさせないように……頑張りますっ！」

み「前後に注意しつつ射精のために、奥にペニスを動かし高めていく。
あっ……はぁっ、あンっ!!」
艶かしいつやかな声がみりあの口から漏れ出る
み「声が止まらないっよぉ!!」
り「凄いなぁ……これはどう？」
莉嘉はクリトリスを指先でやさしく左右に擦る。
み「っひゃん!!それっだめだよぉ！頭真っ白になるのきちゃうっ！」
ペニスへの締め付けが強まる。
P「こ、これ以上はもう……で、出ますっ！」
み「いいよっ！みりあにちょうだいっ！」
その言葉が引き金となり、ペニスは精液をどくどく吐き出した。

り「うわぁっ、オチンチンびくびくしてるー!!Pくん
みりあちゃんの中に射精してるんだぁ♪」
莉嘉が指先でペニスの脈動を感じ取っていた。
み「ンッふぁぁぁ！！お腹の中に、すごいのきてるよぉっ！」
びくびくっと、肢体を跳ねさせながら、歓喜の表情で
射精を受け入れている。
P「くっ……締め付けがっ！」

うわっ♥

あっ♥

膣内がぎゅっとペニスを包み込む。さらなる射精を促すように
びくんびくんと収縮を繰り返し、快感をペニスに与えてきた。
み「あっ、あっ!!すごいよぉっ！どんどん溜まってくるっ♥」
り「うわぁ……まだ出てるのーっ？
いつまで続くの？リカもはやくしてほしいなぁっ!!」
あふれる好奇心を隠そうともしないで、
莉嘉は射精が終わるのを今か今かと待ち続けていた。

ンッ

ドビュルルル

ビクッ

ドクッ

ブリュュュ

ずっと続くのかと思うくらいに大量に吐き出す精液の勢いも次第に弱まり、完全に止る。
「はっ……はぁ、んっ!?」
名残惜しいが、みりあの中からペニスを引き抜いた。
抜けるのが嫌とばかりに膣がきゅっとペニスに吸い付いてきたが、無意識によるものだったのだろう。
「ねぇ、今はどんな感じなのっ!?」
「あ……はぁっ、ぽっかりお股に穴が空いたみたいだよぉ♥すーすーするぅ♥んっ……」
やっと念願叶い思いを遂げられたことが嬉しいのか、目は潤みを帯びていて、一つ大人の階段を登ったことを如実に感じさせた。

ンフッ
はあ。
んっ
ビクッ
ビクッ

「あはっ……オチンチンはまだまだ……。
きもすぐできるよねっ！
ないよーっ！」
獲物を狙う女豹
近に見て興奮した
間
表情は、
ときどころだろうか。
ずりをするように舌を
めたペニスを凝視していた。
しと射精したはずなのに、
ペニスは収まらない。
まだまだ射精できる
そり立ち、
誇示していた……

み「うわぁ……すごーい！」
一方のみりあはというと、
膣からこぼれ落ちる精液を指ですくい取り、
それを目の前に持ってきて興味深そうに
観察しているのだった。

り「早く早く～リカにもPくんのオチンチン欲しいよー」
下着をひょいっと、脱ぎ取り、
待ちきれないと言わんばかりに、横たわり股を開く。
自ら腰を動かして、割れ目にペニスを擦りつけていた。
くちゅりと水音がして、すでに挿入準備が
可能だということを身体が伝えている。
P「では……入れます……カを抜いてください」
り「んっ……いいよっ……ドキドキするよぉ♥」
先端を割れ目に押し当てぐっと前に推し進める。
り「はぁっ……入ってきたぁ♥　んっ……!!」
徐々に割れ目は左右に押し開かれ、
処女膜を押し破る。

り「ふぅっ……んっ……あっ……っ!!」
顔をしかめながらも、ペニスの挿入を受け入れていた。
痛みを感じていないわけではないだろうが、
り「んっ……どんどん奥に来て……いいよぉっ」
と、本人が求めていることもあり、
P「わかりました……ではゆっくりといきます……」
やさしくゆっくりと前後させながら、
奥へとペニスを押し進めていく。みりあでの
こともあり、程なくして亀頭の先が子宮口に触れた。
り「はっ……ああっ!!」
びくんっと、驚いたように身体が硬直する。
り「これが……奥まで来たってこと……なんだぁ♥」
P「大丈夫ですか？」
り「ちょっとびっくりしたけど、大丈夫だよっ!!」
みり「リカちゃんもお奥までおちんちんこれたんだねっ！」

み「んっ……変な味がする……んっ……あむ、ちゅむ」
すくい取っていた精液を舐め、味を確かめているみりあ。
み「わたしとプロデューサーの混ざった味なんだよねっ♥」
不思議な味……」

そうしている間に、ペニスは射精限界にまで高まってきていた。
P「そ、そろそろ出そうですっ！」
り「アタシも……Pくんのこと思って一人エッチしてた時みたいに気持よくなってきたよっ♥あっ!!いいよっ！リカにもPくんの赤ちゃんの素っ……んっ……ちょうだいっ！」

P「動いても……大丈夫ですか？」
早く莉嘉の中も味わってみたかった。
り「んっ……うんっ!!動いていいよっ♥
やさしくしてくれると嬉しいなっ」
P「わかっています。では……」
包み込んでいる肉ひだの感触をペニスでしっかり味わいながら腰を前後させて出し入れを繰り返す。
り「アンっ！Pくん、必死すぎだよぉ！
でも、気持ちいいよぉっ！あっ……
オチンチンすごいっ♥」
顔に浮かぶのは、快感を知った歓喜に染まる女の表情だった。

み「やったぁ！リカちゃんもプロデューサーの赤ちゃんの素、もらえちゃったね♥どう？」
り「すっごい幸せだよぉ♥もっと出してぇ！んっ赤ちゃんできるまでっ……出し続けてっ♥」

その言葉に合わせるかのように、膣内がペニスにぎゅっと食らいつき、射精をもっと促せと言っているかのように、ひくびくと収縮を繰り返すのだった。

り「ふぁぁぁっ!?なっ、なにこれっ!?すごいよぉ!!」
奥までペニスをねじ込み、ここは自分のものだとマーキングするかのように子宮口に精液を当て、胎内を満たす。
り「あっ！Pくんのどんどん……あんっ!!入って……きてるよぉ♥」
ぶるるっと体を震わせて膣内に放たれる精液を顔に喜びの表情を浮かべながら受け入れる。

ん♥

ハッ

ハッ

P「はぁ……はっ……」射精がようやく収まり、莉嘉も落ち着きを取り戻してきた頃を見計らってペニスを引き抜く。

「はんっ!!すごい……なんだが

ぽっかり穴が開いたみたい……

本当にPくんに、はじめてあげれたんだぁ……

嬉しいよっ♥」

目に涙が滲んでいるのは、痛みのせいではなく

極まってのもんのだ。

ブビュッ

ビュッ

P「ふたりとも、本当に私のために……これほどうれしいプレゼントは他にはありません！

素敵な誕生日でした」

み「プロデューサーに喜んでもらえたらよかったよ～!!えへへ」

り「アタシたちのほうがもっと嬉しいよ～」

み「これからもいっぱいエッチしようねっ！」

り「赤ちゃんできるまで、もっともっとするんだからっ♥」

P「ええ、これからもよろしくお願いします！」

自分にだけ向けているからこそ出せる、

彼女たちの最高の笑顔がそこにはあった。

満足するまで身体を重ねあったあと、汗や愛液、精液などの体液を洗い落とすために私達は3人でシャワーを浴びた。

り「もうっ！Pくんったら、お腹の中に出しすぎだよぉ♥あっ……またでてきちゃったあ♥」

み「いくら洗っても、ドンドン中から出てきちゃって、洗い終わらないよー♥」

先程から幾度と無くシャワーヘッドを当てて膣内を洗い流しているが、子宮内に入っていた精液がしつこいくらいに後から後から垂れ落ちてきていた。

り「でもでも、それだけいっぱいアタシたちのことが好きだってことだよね～♥」

み「早く赤ちゃん産んで欲しいってことなんだよねっ♥えへへ」

幾度と無く膣内を洗いなおす二人の表情は幸せに満ち満ちていた。

トロッ

トロ…

それから……私たち3人は幾度と無く互いの体を求め合った。
二人はアイドルとして、一皮むけたかのように更に磨きがかかり、輝きを増した彼女たちの姿は、それは素晴らしいものだった。

激しいダンスもこなす彼女たち。
妊娠が胎児と母体のために、アイドルとしての活動に制限が生じわかるこれとは十分にわかっていて、
やり残したことがないように……後悔しないように全力でアイドルとしての輝きを放っているのだろう。
今、そんな輝きを自らの手で消してしまうことに、躊躇いなくもなるが、妊娠は一人が自ら望んだことだ。
その躊躇いを無下にするわけにはいかない。

ともかく、一人のことを思えば、
妊娠早くかどうかを見極めるために、
検査薬によるチェックを定期的に行うことが良いだろう。

二人もその提案には快く同意してくれたのだが……

みり「どうしても……しなくちゃダメー？」
Pやはり「そうじゃなくてっ！ここですることだよぉ……」
みり「トイレで調べてくれればいいでしょっ!!」
P「いえ、そうはずばり確実に使用するにはですね……」
そ一人のはで姿見たいそれ人ものをかざしがの一点に尽きるのだ。
そ一人で恥ずわ張ざっ目の前でやらせる理由、
そ一人やはだ主りまたくもって正論だ。
そ一人ばいいでしょっ!!」
P「お願い、します……!!」
りもう……目の前でおしっこさせるなんて
りんっ……ちょっと恥ずかしいよぉ、えへへ」
Pくんってばヘンタイだよぉー」
みりまだ、結局のところふたりはいつもの様におしっこを出すため下半身に力を込め始めてくれるのだった。
みりんっ……しょうがないなぁ」
みりんーっ
みりわざとっぽいよねー？」
P「そんなことは……ありません！さあ……
今日の分を始めましょう！」
もはやバレバレではあるが押し通す。
妊娠検査薬を二人の股間の間に差し出すと、
ピクッ
ムズ
ムズ

み「あっ……やっぱりちょっと、恥ずかしいねっ」
P「健康的な黄色い色のおしっこがちょろちょろっと、割れ目の間から控えめに降り落ちてくる。もっと、出してもいいですよ」
み「検査薬に当てることも、しっかりと位置を調整し、勢い良く出してもいいですよ」
P「検査薬に当てることなど造作も無い。
み「むーっ、そうしてるこってもできないよぉっ！
少しはわかってねっ！んもうっ……」
P「あ、はい……すみません」
ちょっと、ふざけすぎてしまったようだ。反省しよう。

P「莉嘉も……いつでも出していいですよ」
り「ま、待って、今出る……んっ、あっ！」
ちょろろっと、莉嘉の割れ目の間からも弱々しくおしっこが流れ落ちてきた。
すかさず妊娠検査薬を適切な位置に移動させて検査薬の先にうまくあたるようにする。
そして、一人共十分な量を当てることができた。
P「ありがとうございました。もう、十分です」
み「んっ……もう止まらないよ～あっ……あっ!!」
り「アタシもっ……このまま全部でちゃっ……」
器用に途中で止めるなんてことができない二人は、すっかり出しきってしまうまで放尿を続けた。

みり「これでいい？」
「アタシも、どうかな？」
P「えぇ、バッチリです」
こちら妊娠検査薬を手に持って
秘部も同時に窓に見えるように
尻を向けてもらいカメラに収まるよう、
ドキ
ドキ
みり「楽しみだなぁ……今日こそ赤ちゃんができてるといいなぁ」
「そろそろできてもいいよねー!!」
毎日Pくんの精子もらってるんだもんっ♥」
待っている間に軽くおしゃべりをする二人。
期待に満ちた目を自分に向けてきていた。
P「もうすぐ、結果が出てくるころです……」
妊娠検査薬の判定窓と終了窓に線が浮き出てくかどうか、
カメラのレンズを向けながらじっくりと注視する。

果たして結果はというと……
P「二人共……妊娠していますっ！」
り「本当っ!?」
み「やったぁ!!えへへっうれしいなぁっ!!」
検査薬には見事に2本の線が浮かび上がっていた。
それも、二人同時にだ。
み「いつもは出てないところにちゃんと線が出てるっ！」
り「Pくんの赤ちゃん、できちゃったんだぁ……」
彼女たちの顔に笑顔が花開く。
最高の笑顔をたえた瞬間を
しっかりと記録に残すことができた。

り「ねえねえ……どう？気持ちいいのー？」
み「お尻ひくひくしてるっ!!おもしろーい！」
みりあの指先が尻穴をさする。
P「うっ……そ、そこはだめですっ！」
り「こんな情けない格好をしてて、今さらそれはないよー」
み「そうだよねー♥乳首もこうしてっ!!」
P「くっ……」
二人の少女にいいように弄ばれる。
なめらかなストッキングの生地越しに二人は足の指で乳首を責めたてる。
荒々しく、愛撫とも呼べないようなものだったが、この異様な状況とも相まって、すぐさまペニスは硬さを増していった。

り「やだぁ……おっきくなってきたよっ！
み「Pくん、こういうのが好きだったんだー!!」
P「ちょっと変態さんだねっ！」
り「どこでこんなことを覚えたのですか……」
み「決してそういうわけでは……うっ！
P「見てたのをちょっとねー」
バレちゃったんだー。えへへっ!!」
どうやら、二人に自分の特殊な性癖がてしまったようだ……

ツン！
ツン

みり「オチンチンびくびくしてきたよー気持ちよくなってるんだぁ♥」
みP「うっ……くっ！」
ペニスの裏筋を刺激しながら、竿全体をしごく。
みP「うっ……そこは!?」
みり「あっ、お尻の穴に指が入っちゃったよっ!!あったかーい、ねぇ気持ちいいの？」
みり「オチンチン、ビクってしてどんどん固くなってるよー。お尻でも感じちゃってるんだねー。あはっ！」
みP「うわーっ!!指をぎゅって締め付けてきてるー!!」

射精寸前にまで高まるペニス。尻穴には自然と力が入り、みりあの指の存在感が増す。
り「びくびくしてきたっ！Pくんてば、こんなので出しちゃうんだー。節操ないなーっ♥」
みP「そうなのっ!?すごーい。精子出すときって、お尻はこんなふうにひくひくってなるんだねっ！」

乳首への足の指先責めに、お尻の穴に挿入される指。二人に情けない姿を晒しているが、なぜかそれは心地よい快感となって身体を支配していた……

P「うっ……くっ、もうっ!!」
ペニスから精液を吐き出し、二人に醜態を晒す。
次から次へと精液は先端から飛び出し、
腹に降りかかった。
「うわぁっ!!精子でたぁっ♥」
「あはっ！すっごーい！お尻の穴も、
精子が出るのに合わせてぎゅーってしてるーっ!!」
こんなのでも、男のひとって、
「気持ちよくなれるんだねー」
「また一つ勉強になっちゃったぁ!!」

り「アタシたちの膣内じゃなくっても、こんなに沢山射精できるんだぁ……」
み「私たちの中でなら、もーっと出してくれるよねっ！」
り「もちろん、これより少なかったら……」
み「わかってるよねーっ？」
二人の顔には小悪魔のように悪戯心に満ちた笑顔が浮かんでいた。
こんな顔もできたのか……と、ぞくりと背筋が震える。
新たなこの後のことを考え、身体が保つだろうかの不安がつぎつぎと面を見られたのだから、何の二人のことを見られたのだから、憂いもなかった。

り「どう？お腹の膨らみ、よくわかるでしょー？」
み「どうどう？違ってるかなー？」
P「はい、こうしてみると、はっきり膨らんできているのがわかります」
毎日見てるために、あまり意識できなかったが、こうして過去の記録と比較してみれば一目瞭然だった。
ほっそりしていた腹回りは明らかに膨らんでいて、単に太っただけというにはもうごまかしが効かなくなってくる頃合いのように思える。

現在のお腹まわりもしっかりと記録に収める。
り「ちゃんと撮れてるー？」
P「えぇ、大丈夫です」
み「これからもっと大きくっていくんだよねー」
生命を宿すその膨らみは、どこか神聖な……
触れてはいけないもののようにも感じられた。

最後に二人の表情のチェックだ。
り「どう？リカたちもずいぶん
オトナになってるでしょー？」
み「どこか、かわってるかなぁ？えへへ」
無邪気だったあどけない表情から、
母性に目覚めてきているのか、落ち着きや
やさしさをにじませる笑みをたたえていた。
P「すごく……いままで以上にいい笑顔に
なったと思いますよ……そうですね……」
感じたことを素直に、二人に伝える……

り「見てー!!お腹こんなにぽっぽっらんでるんだよーっ!!」

Pよそくれなこに、お腹が知っくてん見えるの衣装なんて着せて……

座って仕事でもてえりばるに膨らんだ立ってみんなにたかったの？」

そうづくもてるとき、ばれるのでもなかったが、お腹の膨らみが

強調されてるのがよくわかった。

り「そ、それは仕方なく……」

P「アタシ達、ばれないかドキドキだったんだよっ!!」

り「ドキドキ、今日はお仕置きなんだーっ！」

み「だから、両足が、がっしりペニスを

莉嘉の両足が、がっしりペニスを挟み込み、ぎゅっと締め付ける。

P「うっ……そ、そんなに！」

り「あはっ……気持ちよかった？

こんなのでも、感じちゃうんだぁ

お仕置きにならないかもっ♥」

み「みりあは、プロデューサーの

おちんちんの先っぽ、

食べちゃうからねっ!!」

P「ふっ……くう！」
みりあの口から亀頭に向けて
よだれを落とす。
み「これくらいでいいかなー？」
り「うんっ、よく滑るようになったよ！」
先端からこぼれ落ちた
唾液は竿に伝わり、
両足の潤滑液となった。
り「気持ちいいでしょー？」
P「くっ……はあっ!!」
くちゃくちゃと水音を立てながら
器用に足を上下させ、竿全体を
しごきはじめる。
み「うわぁ、すごーい……ビクビクしてるねっ!!」
り「あはっ!!足だけでイっちゃいそうだよっ！
節操なさすぎっ!!」
み「あーっ!!わたしもプロデューサーの
おちんちんに……はむっ!!」
亀頭の先端がみりあの口内に
すっぽり覆われた。
ジュプッ
ギュプッ
ドロロッ

み「んむっ……じゅぶっ……おむむっ!!」
口いっぱいに亀頭を頬張り、尿道奥から精液を吸い付くさんとするかのように、口をすぼめて息を吸い込む。
P「はあっ!……ああっ!!」
み「きもふいいー!?んっ……じゅるるっ!!」
P「はい……とても、気持ちいいですっ!!」
り「うわぁ、みりあちゃん、すっごいエッチだよー
アタシも負けてられないねっ!!」
足のしごきが早まり、竿をますます快感が覆う。
り「ほらほらっ、アタシの足とみりあちゃんのお口で射精しちゃていいよぉ♥」
み「んむっ……おくちのなかで、ぢゅろっ!
びくびくしてるよぉ……んぶぶっ♥」
P「くっ……で、出そうです!」
二人の少女によって、ペニスはあっという間に射精に導かれる。
ぐぢゅるっ♥
ぐもっ

あっは♥
ニヤッ
あっ
ドビュッ♥
ズビュルル
射精の瞬間を見計らい、みりあがペニスから口を離す。ふっと、竿にかかっていた両足の圧力も弱まり、ペニス全体が開放された瞬間、鈴口から精液が解き放たれた。
み「わぁっ……すっごぉい！」勢い良く発射された精液は高く飛び散り、辺り一帯に撒き散らされた。
り「うわぁ……すっごく飛んでるよぉ♥」
み「あっ!!こっちに飛んできたぁ。顔にかかっちゃうよぉ♥」
精液はびちゃと降りかかり、みりあや莉嘉のからだに白い染みを作る。
り「も～っ!!アタシたちの足と口でどれだけ気持ちよくなっちゃったの？節操なぁ」
み「でもでもーそれって、わたしたちだから、気持ちよくなっちゃったんだよねっ!!」
り「あはっ!!それなら仕方ないかぁー♥」
飛び散る精液を満足そうに眺めながら二人はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

P「も、もう出ませ……ん」
射精が終わった頃には、二人の体はすっかり精液にまみれていた。

り「うわぁ……顔まで飛んできたぁ……Pくんの射精、すっごぉい！」
み「おちんちんいもいっぱいついてるよぉ……んむっ……ちゅろろっ、ぺロレロ♥」
みりあは精液を舌で舐め取ると、美味しそうに飲み下していった。

り「あはっ……変な味がするよー♥」
顔についた精液を指ですくい取り、ぺろりと舐めた。

思えば、はじめての時からこの二人には主導権を握られっぱなしだ。
二人にはこの先、一生逆らえそうにない。
新ためて、そう実感した……

り「今日はねぇ……お尻でPくんのオチンチンを
いじめちゃうよーっ♥」
み「こっそりお尻にオチンチン入るように練習してたんだよっ♥」
二人の体のことを心配して、セックスを控えていたのだが、
我慢できなかった二人がこういう発想に至るとは……
思いもしなかった方向に進んでしまったらしい。
ぬっ
ヌリ
二人はペニスを挟んだまま密着し、
そのままペニスをシゴキ始めた。
P「くっ……はあっ、あっ!!」
み「気持ちい?このまま出しちゃうまで
擦ってあげてもいいけど……」
り「アタシから先にPくんのおオチンチンを
お尻で食べちゃうよっ!!」
肛門にペニスの先端をピッタリと合わせ、
そのまま腰を落とし始めた。
り「んっ……広がって……入ってきたぁ♥」
穴はペニスに合わせるかのように広がり、亀頭は温かい
腸内に導かれてゆくのだった……

り「んっ♥どと、どうかなっ？あっ……ンンっ！おしりの中、気持ちいいでしょ～？」
腸内はまとわりつくかのように
ペニスを包み込む。
P「くっ……からみついてきて……
とても気持ちいいですっ」

膣とは違った感触で、とくに肛門の
括約筋の締め付けのきつさは
これまでにないほどだ。

フッ
んっ♥
あっ
ズッ
ズッ

り「はっ……んっ！ビクビクしてる～♥
本当に気持ちよくなってるんだねーっ」
み「いいなぁ、みりあも早くしたいよーっ」
り「あはっ……ちょっと待っててね！
んっ……ン～！」
胎内から排泄物を出すときのように
いきみはじめる。
P「うっ……こ、これはっ」
奥からぐいぐいと押し出そうとする
圧力でペニスは外に排出された。

み「わたしの番だねーっ……はぁ……あっ!!
お尻の穴っ、広がってくよぉっ♥
すごいよぉ、おちんちんでいっぱいになっちゃう!!」
P「うっ……これは……すごいきつい……です!」

莉嘉のときよりもさらにきつい締め付けだ。
みりあは歓喜に身体をブルブルと震わせながら、
ペニスを出し入れして刺激を堪能する。
み「あっ……んっ♥あああっすごいよぉっ!
プロデューサーのおちんちん、あったかいよぉ♥」

り「あーん!アタシにもまたちょうだいっ!」
み「うんっ、順番に入れようよっ!んーっ!!」
みりあがいきむと、
ずるんっとペニスが勢い良く引きぬかれた。
P「ふっ……くあっ!」

ペニスは二人の尻穴を交互に
行き来する。
私の意思など、存在しないかのように、
二人はペニスをもてあそぶのだった。

ンッ
ハッ
アハッ
ハッ♥
フッ♥
ズッ
ズッ
ズッ
ビクッ
ビクッ
み「ねぇねぇ、どっちのお尻で射精したいー？」
P「そ、そんなこと……決められません……」
り「もうっ！そんな優柔不断なオチンチンは
このまま外に出しちゃうからねっ!!」
み「そうだねーっ！射精しちゃえーっ!!
えいえいっ♥」
二人の尻がペニスを挟み込み、
そのまま身体を寄せ合い、きつくプレスする。
タイミングを合わせて上下することで、
均等にペニスはこすられてゆく。
すでに、二人の尻穴の中で
高まっていたペニスは
すぐに射精寸前にまで膨らんでいった。

P「うくっ……こ、これ以上はもうっ！」
堪えきれなくなったペニスの先端から精液が放たれた。
り「あはっ……出しちゃったんだぁ」
み「あっ！お尻にいっぱいかかってきてるー!!」
り「どっちにも決められないなんてPくんらしいけど、
二人の中に平等に出してもらうに決まってるんだから、
悩まなくてもいいのにー♥」
み「そうだよーっ！」

ハッ
ハッ
ラブッ
ドドッ
ドドッ
ドピッ
トロッ

み「じゃあ、今度こそ、どっちから射精するか決めてねー？」
P「えっ？それはどういう……」
り「一回無駄撃ちになっちゃったねー!!ちゃんと決めてたら、2回で済んだのに」
み「ねーっ!!くすくすっ」
P「が、がんばり……ます」
当然のようにこの後しっかり二人の尻の中に射精するまで、終わらせてはくれなかった……

みり「こうだっけ？えへへっ」
「ぶいっ！キレイに撮れてるー？」
見成ほ腰す
て長ニど回で一
取し人にりに人
るての膨と以の
ることができる。
お腹の膨らみは、
前に記録した二人の
比較する必要もない
ほどの胎内で赤ちゃんが順調に
育っていることをはっきりと
二か マ つ今
人わデタニけまウ
にいザ二人ててエ
といイテとはとス
てもよく似合っていた。
ストサイズが変化したため、
と同じ下着はさすがに
ない。
妊婦専用の
ィ下着をつけている。
性を重視したものだけあって、
ザインで
インで

P「では、お腹の撮影をしますね……」
二人の膨らみを帯びた腹をアップに、
じっくりとカメラで撮影する。
り「どう？すっごく大きくなったよねっ♪」
み「重くって大変なときもあるけど、時々赤ちゃんが動いて
ぽこぽこってなるんだよっ！」
り「産まれてきてくれるのが、すっごく楽しみー!!」

カメラに写った二人の顔には期待と共に若干の不安が入り混じった表情が浮かんでいた。
元気に振る舞っていても、体調の変化や、初めて出産に対する不安は段々大きくなっている。
そのうすぐでの二人の顔に笑顔が浮かぶのは、もう赤ちゃんに出会えるという、ことが大きい。
P「私も、赤ちゃんに逢えるのが楽しみです。もう、そんなに長くはかからないはずですから……
それまで、3人で頑張りましょう！」

み「あっ……おっぱいムズムズするぅ♥」
やわらかな感触だった胸も、指を押し返すくらいまでの弾力をもつようになっていた。
中に母乳がつまっているのだと、意識させる。
み「もしかすると、おっぱい出てきちゃうのかなぁ」
り「んっ……アタシもむずむずしてる。それに、この匂いってもしかして……？」
部屋の中にうっすら漂う甘い匂い……
まごう事無き、ミルクの香りだった。

み「あっ……おちんちん、奥に当たってるよぉ♥」
初めての時のような、子宮口を突いて痛がるそぶりはもはや全く見られなかった。あがるのは、つややかな嬌声。
ぷるぷると腹を前後させながら、ペニスを受け入れる。
り「Pくん……アタシにもぉ……はむっ……んっんっ！」
莉嘉と夢中になって舌を這わせ、互いの口の中を貪るように舐め合う。
妊娠してから、性欲も旺盛になったのか、
二人はますます積極的になっているようだった。

み「あっあっ！おっぱい出てきたよっ!!」
り「あんっ……アタシもでてきてるっ♥」
指先に生暖かい液体が触れる。
みりあの出した母乳がかかっているのだ。
莉嘉の胸をもんでいた左手にも同様に液体が滴り落ちる。
み「わぁ……私、ママになってきてるんだぁ……」
り「アタシたちの体、赤ちゃんのものになってきてるよぉ♥」
み「もっと揉んでいいよっ！いっぱいおっぱい出してっ!!」
揉み続けると、その勢いは止まるどころか、ますます勢いを増してきているようだった。
その二人の様子にペニスはますます硬さを増し、射精寸前にまで高まる。

P「も、もう……出しますっ！」
み「あっ……お腹の中に……きたぁ♥」
みりあの膣内に精液を放つ。
み「あったかいよぉ……すごいいっぱい……きてるよぉ♥」
り「いいなぁ……んっ、あとでリカにも……あむっ!!もらうんだからっ」
み「おっぱい敏感になって……あっ……そんなにつよく揉んだらっ!?イっちゃうよぉっ♥」
ビクッと、体が跳ね上がり、膣がペニスをさらに射精を促すように締め付ける。
ペニスは期待にこたえるべく、精液を送り込む。
さらに勢いは、もはやシャワーとい二人にてまき散らしていた。
つの膣内はるほどでも母乳にその
よいの

み「はぁ……あっ気持ちよかったよぉ♥」
ようやく母乳の噴出もおさまりつつあり、ぽたぽたと垂れ落ちるだけになっていた。
り「おっぱいどんな味だろ……Pくんもいっしょに飲んでみよっ♥」
そういうと手ですくい取った母乳を口元にもってきてとろりと垂らす。
P「んっ……」
り「はむっ……ちょっと薄味だけどおいしい♥」
夢中になって、二人で母乳を舐めとった。
み「みりあも飲むう……んっ……んむう♥」
うっとりと上気した声で、みりあもぺろりと自分の母乳を舐めとるのだった。

眼前の膣を指で押し開くと、サーモンピンクの中身が愛液で光り輝いていた。

み「あっ!!そんなにじっくり見たら、恥ずかしいよー」

妊娠前に見る機会があった時には、きれいな点のようになっていた子宮口は、受け入れる必要がないからか、ぴっちり閉じている。

P「とってもきれいですから、大丈夫です」

この奥に赤ちゃんがいるのかと思うと、熱いものがこみ上げてくるのを感じた。

り「あ……オチンチン……入ってきたぁ……」

体重の増した莉嘉の重さが腰にずっしりとのしかかる、と同時にペニスは熱い粘膜に包まれた。

み「りかちゃんのおっぱい、ちょーだぁい!!」

り「ひゃんっ!!あっ、くすぐったいよぉ♥」

み「あむっ……んーっ!!ちゅむっ」

みりあは必然的に自分の上に尻を向けてまたがり、股間を広げ見せつけている格好になった。

り「あっ……はぁん！オチンチン気持ちいいよぉ……」
莉嘉が自らのペースで腰を振り、ペニスを出し入れする。
そのタイミングを合わせて軽く上下に腰を動かす。
り「はっ……すごいよぉ……あぁっ!?」
み「んむっ……ちゅむぅ……おっぱいでてきたよー」
胸からとろりと母乳が湧き出し、こぼれ落ちた。
り「んっ！あんっ！そんなに吸い付いちゃっ……ダメぇ♥」
莉嘉の胸と膣、両方に快感が生じ、
気持ちよさそうに嬌声を上げる。
り「あっ、赤ちゃん動いたぁ♥もう、幸せだよぉっ♥」
P「うっ……締め付けがきつくっ!!」
膣がひくひくペニスを締め付ける。
ゆさゆさと腹を揺らしながら、精を求める
動きが激しさを増していく……

み「んんーっ♥いっぱい出そうねっ!!あむっ!」
り「あっ……みりあちゃんそんなにぎゅって乳首噛んじゃ……だめぇっっ!イっ……くうう!」
膣が痛いくらいにぎゅうとペニスを圧迫する。
P「ああっ……も、もう!」
り「あっ……お腹に熱いの当たってるよぉ♥」
こらえきれずに莉嘉の膣内に精を解き放つ。
み「んっ……っくっくっくっ♥」
同時に母乳が勢い良く吹き出し始める。
あっという間に部屋中に甘いミルクの香りが充満していった……
ハッ
ハアッ♥
アッ♥
ん~♥
ピュー
ピュッピュッ
プシッ
ドビュビュビュ
ブビュビュビュ……

り「はぁ、すごかったよぉ……おっぱいとアソコ、同時に感じちゃったぁ♥すっごい気持ちよかったぁ……はぁはぁ♥」

結合部からペニスがズルリと抜けると、中から大量の精液がドロっと溢れだした。

り「んっ！いーっぱい出てるぅ」

み「あむ……あむんっ！おっぱいすっごく美味しいっ!!んっ……」

り「あっ……みりあちゃんってば、赤ちゃんみたい……早くお腹の赤ちゃんにも飲んでもらえるといいなぁ……」

幸せな妄想に見を浸らせ、微笑を浮かべる。母性を感じさせる、慈愛に満ちた笑顔だった。

り「あっ！Pくん、ちょっとこっちにきてー」
Pくん「二人共、何をしているのですか？」
りみ「いまから、おっぱいしぼるんだよー！えへへ」
りみ「母乳が出るようになったら、定期的に絞って出さないと、勝手に出ちゃうようになっちゃって……」
Pくん「寝る時に、パジャマとかが、いつの間に濡れて大変なんだよー!!」
りみ「だから、寝る前にこうやって、絞り出しちゃうんだー。どうせなら無駄にしたくないし……Pくんが飲んでよっ！」

り「ほらぁ、早くこないとみ「おっぱいが無駄になっちゃうよー？」
Pくん「わ、わかりました。飲んで……みたいです」
みり「じゃあ、ここに頭乗せてっ！」
Pくん「若干の思案のあとに、そう返答した。
りみ「膝枕するっ！えへへ」
Pくん「えっ？直接飲むのでは……？」
りみ「いいから、いいから、いいからー」
Pくん「促されるまま、ぽく笑みを浮かべる二人にりみあれずらっぽいの膝に頭を横たえる。

二人はそれぞれ慣れた手つきで自分の胸の膨らみの周りから中心の乳首に向け、寄せ集めてゆくように揉んでいく。
り「んっ……そろそろ……出てくるはず、あっ！」
み「うん……でてきたよー!!ほらっ！」
P「あっ……いい匂いが……してきました」
甘い匂いが部屋の中に立ち込める。
それは、どこか懐かしい香りだった。
母乳期に飲んだであろう、
母の乳の思い出が残っているのだろうか。
トロッ
じわじわっ
み「おっぱあけててねー。すぐにいっぱい出てくるようになるよっ♪」
り「口に届くくらいに勢い良く飛ぶんだからっ！」
P「はい……わかりました。ん……あーん……」
一人の胸からじわじわっと染み出すように出てきた母乳は、次第にぴゅっと飛び出るくらいに勢いを増していき、顔や口にかかるほどになっていた。

Pり「んむっ！んっ！」
あり「あっ、いっぱい出てくるようになったぁ！」
舌を空けていた口の中に二人の体温の母乳が降り注がれる。
はり「はっ、Pくん必死になってるぅ♪」
Pくん必死になってるぅ♪」

み「妹にこっそりおっぱいあげたことあるけど
飲んでるところ、そっくりだよっ。
赤ちゃんみたいーっ♥」
無心にそれもんみたいかもしれない。今は赤ん坊のように
結局二人の両方の胸から母乳を出し終わるまで
母乳のシャワーは続いた。

み「ねえねえ、美味しかったー？」
P「は、はいそれはもう」
り「じゃあじゃあ、これからはPくんに飲んでもらうことにしようよー」
み「あーっ!!それがいいねーっ！」
P「……善処します」
母親としての自覚が芽生えながらも、まだまだあどけなさを残す無邪気な笑みがこちらを見つめていた。

り「しっかり撮れてるーっ？」
み「赤ちゃんがおっきくなったら、一緒に見るんだから、ちゃーんと撮ってね♥」
P「はい。バッチリ撮れてます。心配しないで下さい」
仲良くやってきた。
いよいよ二人同時産のタイミングだ。
考えられる限りの出産の準備を施し出産に臨む。
二人は仲良く密着するように身体を寄せ合いながら、股を大きく開いて、
赤ちゃんが産道を降りてくるのを待つ。
り「んっ……ふううっ……はあっ!!」
み「ふうっ……すううっ……ふうっ……」
ぶるっ
ブッ
ビッ
恥丘が徐々に内側から盛り上がりはじめる。
赤ちゃんの頭が外に見える寸前まで降りてきていた。
P「もう少しで、赤ちゃんの頭が見えるはずです！」
次第に割れ目が内側から押し開かれ、
ついには、赤ちゃんの頭部が現れ始めた。
ボコッ
ズッ
ズズッ

内側から押し広げられていく膣。
やがてはっきりと赤ちゃんの頭部がちらちらと見え隠れするようになった。
P「頭部が見えてきました！」
り「はあっ！赤ちゃんの頭……出てきたぁ！」
み「あっ……これが、そうなんだっ……んっ！」
一人は自分の割れ目に手を添え、その存在をしっかりと確かめる。

み「はあっ……広がっちゃうよぉ……オチンチンより太いのあそこ通りぬけてきてるっ！」
り「はあっ！赤ちゃんの頭……どんどん外にっ……出てきちゃってる♥」

ハッ
ハッ
ハアッ
フッ
ンッ
あっ
かちっ
ぐにぐにっ！
ぬぐっ
ぐぐぐっ

ん〜っ

ア…ッ

フ…ッ

ハアア…ッ

ん〜!!

ハ…ッ

ブボッ

ブボッ

ズボボッ

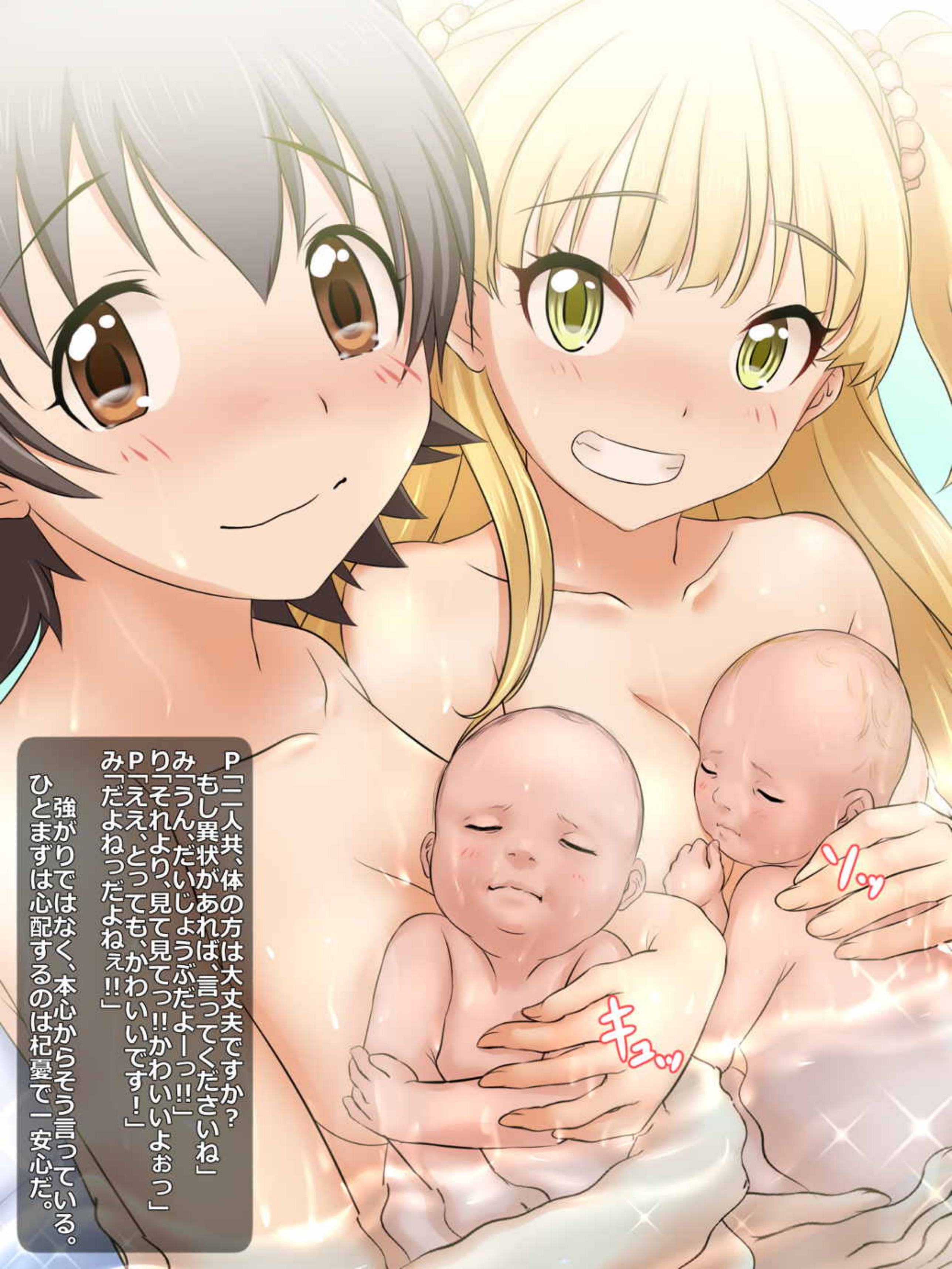
り「あっ……あっ！広がるっ……！
ふあっ……はぁぁぁーんっ!!」
大きな叫び声とともに
赤ちゃんの頭がずぽっと外に飛び出した。
り「はあっ……あっ！頭、でてきたよーっ♥
ちゃん見てたぁ？」
P「ええ……しっかり撮れました！」

み「あっ……みりあもっ……あっあっ!!」
塞いでいた蓋が外れたかのように、頭が飛び出す。
み「んっ……頭でたの？はあっ……急にすっごい
広がって、びっくりしたぁ♥　あっ……はぁ」
P「しっかり見えてます……ふたりとも、もう少しです！」
赤ちゃんの体を出やすくするため、
指で膣口を左右に広げて、
片方の肩が出るようにぐっと傾けてあげると、
驚くほどすんなりと、身体が抜け出てくるのだった。

り「あっ……出てきたぁ♥」
み「私たちの赤ちゃんだぁっ！やったぁ！」
人の体温ほどのお湯に飛び出した赤ちゃん。
まだ子宮の中にいるようなものだ。
ふわふわ浮かんでいるかのように
気持ちよさそうに水の中を漂っていた。
すぐさま、二人のもとに赤ちゃんを引き寄せる。
り「うわぁ♥」
み「かわいいよぉ！」
口の中に溜まっていた羊水を吸い出してあげると
元気な産声をあげはじめるのだった。
あは♥
ハァ
わっ
ハッ
ハッ
ゴボッ
ジュブブッ
フワッ

元気な赤ちゃんの声を聞いて、今日一日の大仕事を終え、ほっと一息ついたあとは、すやすやと眠りにつくのだった。

「ふぁぁ～っ……かわいいよぉ♥」
「はわぁぁ……あったかぁい！」
優しく赤ちゃんを包み込み、感触を確かめるかのように、肌にぴったりと寄り添わせていた。
「あっ……むずむずしてる～」
「手が動いてるよぉ」
赤ちゃんの一挙手一投足に歓喜している。
二人の顔は、頬が緩みきった幸せでしょうがないといった笑顔を終始浮かべているのだった。



P「二人共、体の方は大丈夫ですか？もし異状があれば、言ってくださいね」
み「うん、だいじょうぶだよーっ!!」
り「それより、見て見てっ!!かわいいよぉっ」
P「ええ、とっても、かわいいです！」
み「だよねっだよねぇ!!」

強がりではなく、本心からそう言っている。ひとまずは心配するのは杞憂で一安心だ。

P「では、記念に……撮影しますね」
P「うんっ……撮って撮ってぇ！」
みり「いいよーっ!!ほらぁ、えへへっ！」
P「すごく……素敵です！」
最高に笑顔を見られることが
自分よりも、幸せなことなのだ。
キラキラした物……
そんなこと誓った……
心を守り続けたくなるような
にまとまで一番と思えるほど
はをキツに女のこっ手ラまとた笑に
き放輝でっち顔はりさくもてのが今
とな宝見なこ浮まで
誓い物……
ように努力し続けることを、